

うるくの歴史と文化を語る会
会報 **ガジャンビラ**
創刊号

発行：うるくの歴史と文化を語る会
発行人：新垣 敏雄 編集人：當間一郎
〒901-0153
那覇市田原4-1-1 JA おきなわ小禄支店内
TEL.(098)857-1175 FAX.(098)852-1486

語る会の発足にあたって



代表
新垣 敏雄

出身は何処ですか？と聞かれると「小禄です」と答える。18歳まで旧小禄村で生活し、その後、ほぼ40年間他処で生活しているが、やはり小禄と答えてしまう。

「うるくや日本がやースゥー、電気ぬちかと一れー日本やさスゥー」とはどういう意味ですか、「ガジャン・ビラ」はどうして名づけられたんですか、「うるくくとばのイントネーションの特徴はどうして？」隣の「ペリー」は何んで名づけられたんですか、「小禄・豊見城・垣花三村・三村ぬあぐわ達」はどういう関係ですかなど、小禄出身だということ、以上のような質問をよくあびせられる。

答えられそうで、本当のことが言えるかどうか定かでない問いばかりである。

我々が、漁業中心の村と思っていた大嶺に、1698年に、農業の神様トゥーティーケー（土帝君）が中国から持ちこまれ、農業を奨励するために祭られている。

本会の趣意書に記されている如く、以前は、豊見城間切と真和志間切に属していた小禄地域が、両間切から分離・独立して、小禄間切として誕生したのが1672年であるが、昭和26年に12ヵ字となり、昭和29年に那覇市に合併するまで、永年の間に何回か変遷を重ねてきた。

その間に社会状況や生活環境も変動して、地域の特徴を作り出し、前述のような質問や疑問等も出されるのである。

このような歴史・伝承を正確に知り、伝えたいと何名かの有志が10年前からにつめていたのを、今回実現し、調査・研究・討議して、後進の人達の理解と励みにし、地域の発展に寄与する会にしたいと思う。会員の皆様のご協力を切望する。

趣 意 書

旧小禄村の歴史は古い。1672年（寛文12年）に豊見城間切から8ヵ村（大嶺、宇栄原、赤嶺、高良、具志、当間、安次嶺、罕宮城）が独立し、真和志間切から3ヵ村（小禄、金城、儀間）が独立して、11ヵ村で小禄間切が成立した。その後、湖城、松川、堀川、田原の4ヵ村が新設され、計15ヵ村で明治期を迎えた。

明治36年に土地整理が完了し、大嶺、小禄（堀川、田原を合併）、宇栄原（松川を合併）、高宮城（高良、罕宮城を合併）具志、当間、安次嶺（赤嶺、金城を合併）、湖城、鏡水（安次嶺、儀間の各一部）の9ヵ村となった。同年に儀間村は那覇区に編入された。

明治41年9ヵ村で小禄村となり、大正3年、字湖城が那覇市に編入され、小禄村は8ヵ字となる。昭和26年に高宮城が高良、宮城となり、田原、金城、赤嶺の3字を起立し、12ヵ字となった。そして、昭和29年9月に那覇市に合併した。

このように旧小禄村の変遷、12字の出入りが、永年に何回も行われてきた。したがって、永い歴史の間に培われた政治、経済、教育、文化等にも、地域性豊かな特徴が見られる。それらは部分的には諸史（資）料に記録

されているが、まとまったものは見出せない。さらに古老たちが、生活環境の中で身につけた伝承が、今日に継承されている。その中には貴重な話が多い。「伝承」は歴史を構築するに側面的な資料になり得るので、早急に各字に伝わるものの掘り起こしと収集、整理をして、旧小禄村の歴史と文化を研究する基礎資料として、公にしていく必要がある。

以前から「那覇市史」の刊行が続けられて、その中に旧小禄村の調査報告も掲載されているが、それは限られた分野の報告やまとめであって、旧小禄村の全地域を対象にした詳細なものではない。したがって、遅きに失しているが、これから旧小禄村の歴史と文化の調査、研究する会を組織し、行動を起こしたいと考えている。それには多くの仲間の持続する力が必要になってくる。

まず、旧小禄村出身者が積極的に参加し、どのようなジャンルの調査、研究を行っていくか分担しながら、さらに地域研究に賛同する方々にも加わってもらい、旧小禄村のあらゆる分野を調査、研究する会を目指したい。そして定期的に成果を公にし、将来、確かな資料集の刊行を実現しながら地域発展に寄与する会にしていきたい。

うるくの歴史と文化を語る会会則

(名 称)
第1条 この会は「うるくの歴史と文化を語る会」と称す。

(目 的)
第2条 この会は小禄間切、旧小禄村の風土と環境及び歴史と文化全般に関することを学ぶとともに、諸史（資）料の調査と収集を行い、その成果を公にすることを目的とする。

(事 業)
第3条 この会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

(1) 研究会 定期的に行う。

(2) 記録の作成 録画、録音、その他を随時行う。

(3) 調査研究 随時行う。

(4) 機関誌 「小禄文化と風土」を発行する。

(5) 会 報 「ガジャンビラ」を随時発行、配布する。

(6) 本会の目的達成に必要な諸事業

(会員・役員)
第4条 この会は小禄間切、旧小禄村の風土と環境及び歴史と文化全般に関心を持つ者を会員とし、次の役員を置く。

(1) 代表（1名）、副代表（1名）、事務局長（1名）、書記（1名）、会計（1名）、幹事（若干名）。

(2) 役員の任期は2年とし、総会で選出する。但し再任は妨げない。

(総 会)
第5条 総会は、毎年1回開催する。

(賛助会員)
第6条 この会の趣旨に賛同し、役員の推薦する者を賛助会員とする。

(会 費)
第7条 この会の会員は、別に定める会費を納入するものとする。

(運 営)
第8条 この会は会費及び寄付金などで運営する。

(事務局)
第9条 この会は事務局を、那覇市田原4－1－1 J Aおきなわ小禄支店に置く。

※付 則

1. 会費は年間 5,000 円とする。

2. 本会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

3. 会則の変更は、総会において行う。

4. この会則は平成14年5月9日から施行する。

発 足 総 会

日 時：平成14年5月9日（木）午後7時
場 所：J Aおきなわ小禄支店 3階ホール
次 第
司 会：新崎 進（沖縄県立図書館）

開会の挨拶
世話人 赤嶺 和雄（設計同人G A N代表者）

設立の意義
世話人 新垣 敏雄（順天堂クリニック院長）

議 事
1. 会則の承認について 長嶺 文雄
2. 役員の選任について

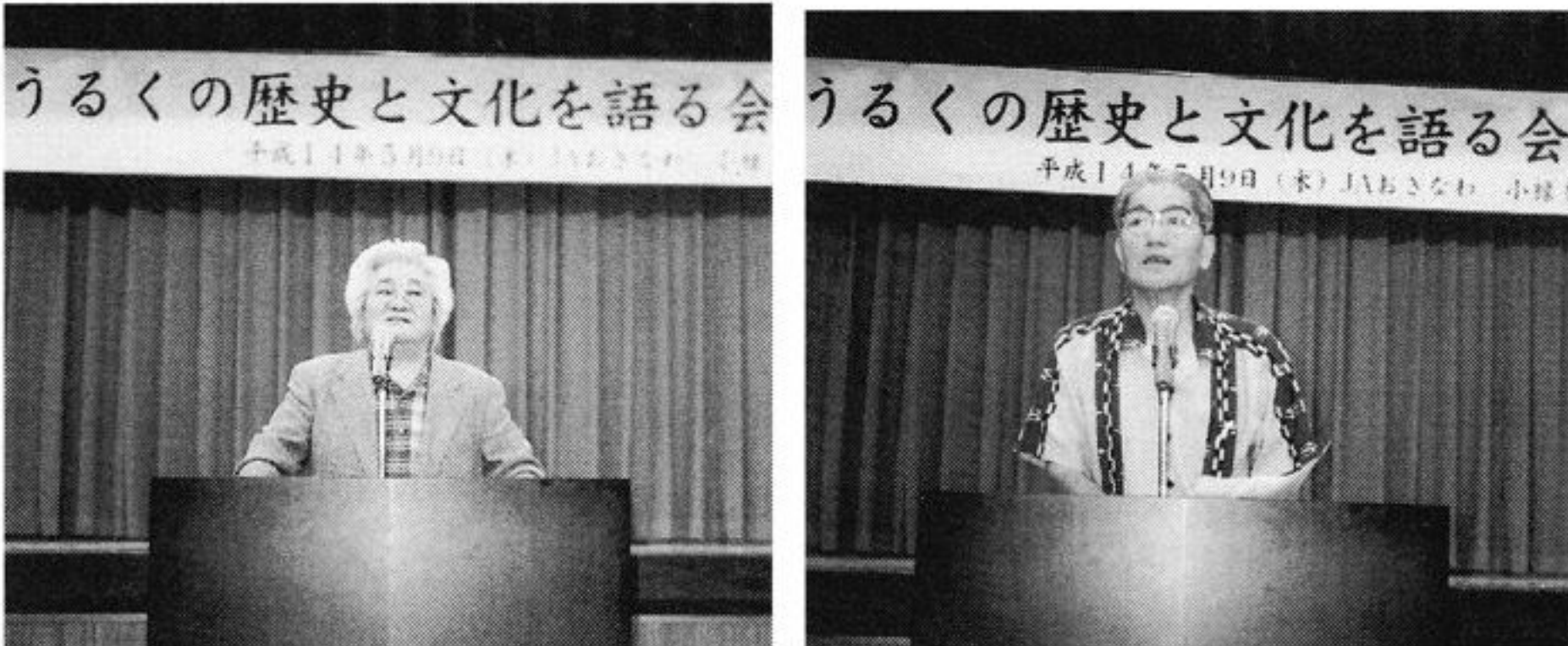
記念講演
小禄間切について
當間 一郎（沖縄芸能史研究会会長）

閉会の挨拶
世話人 上原 健秀

懇親会（交流会） 立食パーティー

乾杯の音頭 大城 惟宏（J Aおきなわ 会長）

幹事挨拶



新垣敏雄代表 當間一郎代表



幹事挨拶



交流会

琉球新報 平成14年5月14日

うるくの歴史・文化を次代に



旧小禄村の歴史などを学ぶ「うるくの歴史と文化を語る会」の発足総会＝那覇市田原のJAおきなわ小禄支店

先人の足跡を調査研究

小禄間切や旧小禄村の風土や歴史、文化を学び、次代に語り継ぐと、「うるくの歴史と文化を語る会」の発足総会が九日、那覇市田原のJAおきなわ小禄支店で開かれた。同会では小禄間切、旧小禄村の各分野にわたり調査、研究を行い資料集をまとめていく。

「語る会」発足 資料編さんへ

古い歴史を持つ小禄間切、協力していいものが切、旧小禄村について実を結ぶようにしたい。は、まとまった史・資料がないため、会では歴史に新垣氏、副代表には沖・文化など各分野の調査研究を行い、その成果をまとめることを目的としている。

総会には小禄出身者を中心に三十余人が参加。同会の意義について、世話人を務めた新垣敏雄順天堂クリニック院長は「小禄を後に続く人たちに残していくことが趣き。主役は皆さんであ話した。」

また「うるく間切について」と題した富間氏の記念講演も行われ、小禄間切と首里王府の関係、儀間真常や袋中上人のかかわりなどについて紹介。「うるくの良きや農業、産業、人物も含め掘り起こしていきたい」と話した。

発足総会の模様が県内紙に掲載されました。

沖縄タイムス 平成14年5月14日

歴史・文化を後世へ



小禄の歴史や文化を語り継ぐと9日に発足した「うるくの歴史と文化を語る会」＝JAおきなわ小禄支店

小禄地域の歴史や文化を掘り起こし、後輩たちに伝えていくと構想から十年を経て、九日、「うるく（小禄）の歴史と文化を語る会」が発足した。

「うるくを語る会」がスタート

産業の掘り起こしも

「語る会」は、那覇市に一切の歴史、文化全般に関する資料を作成することを目的に、字ごとに伝えられた民間伝承まで掘り起こしていく考え。定期的に研究会を開き①機関誌「小禄文化と風土」②会報「ガジャンピラ」を発刊する。

浄土宗の僧・袋中について話した。当間さんは「小禄の歴史や文化のことが分かるまとまった資料がない。後輩のために協力して残していく」とあいさつした。

同会では、小禄に関心がある人を、小禄出身のいかんを問わずに募集している。問い合わせは事務局のあるJAおきなわ小禄支店、電話098（857）1175。

設立総会には四十余人が出席。新垣会長は「小禄の歴史や文化のことが分かるまとまった資料がない。後輩のために協力して残していく」とあいさつした。

副代表で沖縄芸能史研究会会長の当間一郎さんが「小禄間切について」の題で講演。垣花出身で、沖縄最大の産業功労者・儀間真常や、儀間が弟子入りした

JAおきなわ小禄支店で開かれた発足総会で、会長に新垣敏雄さん（順天堂クリニック院長）が選ばれた。

うるくの歴史と文化を語る会 役員名簿

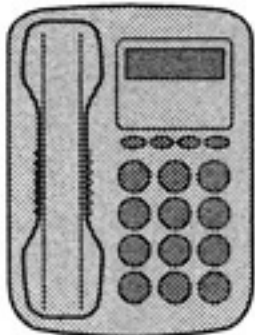
役 職 名	氏 名	連 絡 先	住 所
代 表	新垣 敏雄		
副 代 表	當間 一郎		
幹 事	上原 健秀		
幹 事	安次嶺 馨		
幹 事	赤嶺 健治		
幹 事	高良 肇		
幹 事	金城 新栄		
幹 事	具志 清栄		
事務局長	赤嶺 和雄		
書 記	新崎 進		
会 計	長嶺 文雄		

上江	
上地	
上原	
上原	
上原	
上原	
上原	
上原	
大城	
大城	
大嶺	
金城	
金城	
金城	
金城	
具志	
平良	
當間	
當間	
當間	
長嶺	
波平	
成定	
平敷	
与儀	

うるくの歴史と文化を語る会 会員名簿一覧表

氏 名	電 話 番 号	住 所
赤嶺		
赤嶺		
赤嶺		
赤嶺		
赤嶺		
赤嶺		
安次嶺		
新垣		
新垣		
新垣		
新崎		
新崎		
新崎		

※会員募集中！！



ガジャンビラの由来

■東恩納寛惇著『南島風土記』（沖縄文化協会 1950 年）■

《蚊阪（がじゃんびら）》

「垣の花より小禄・安次嶺に至る陂嶺、もと儀間村籍内の小字、明治36年以後鏡水に移管した。その陂上の台地一帯を上棚と称す。上棚・上の屋・上の毛等は、随所に在って元来地勢の形容より出た名称で、固有ではない。〈がじゃんびら〉も亦音によって字を配するもの、元来は〈我謝の阪〉等から出たものと思はれる。但、我謝の地名は此辺に見当たらない。屋号にや。伝言録儀間を儀見山に作ってあるのは、その音読に依って異字を用いたものである。」

■『沖縄大百科事典』（沖縄タイムス社 1984 年）■

《ガジャン坂——ビラ》

「那覇市の垣花と小禄を分ける坂道。〈筆架山〉あるいは〈蚊阪〉とも書く。また、音によって字を配することから、〈我謝の阪〉などから出たともいう。もと小禄間切儀間村の小字で1903年（明治36）以後鏡水に移管。

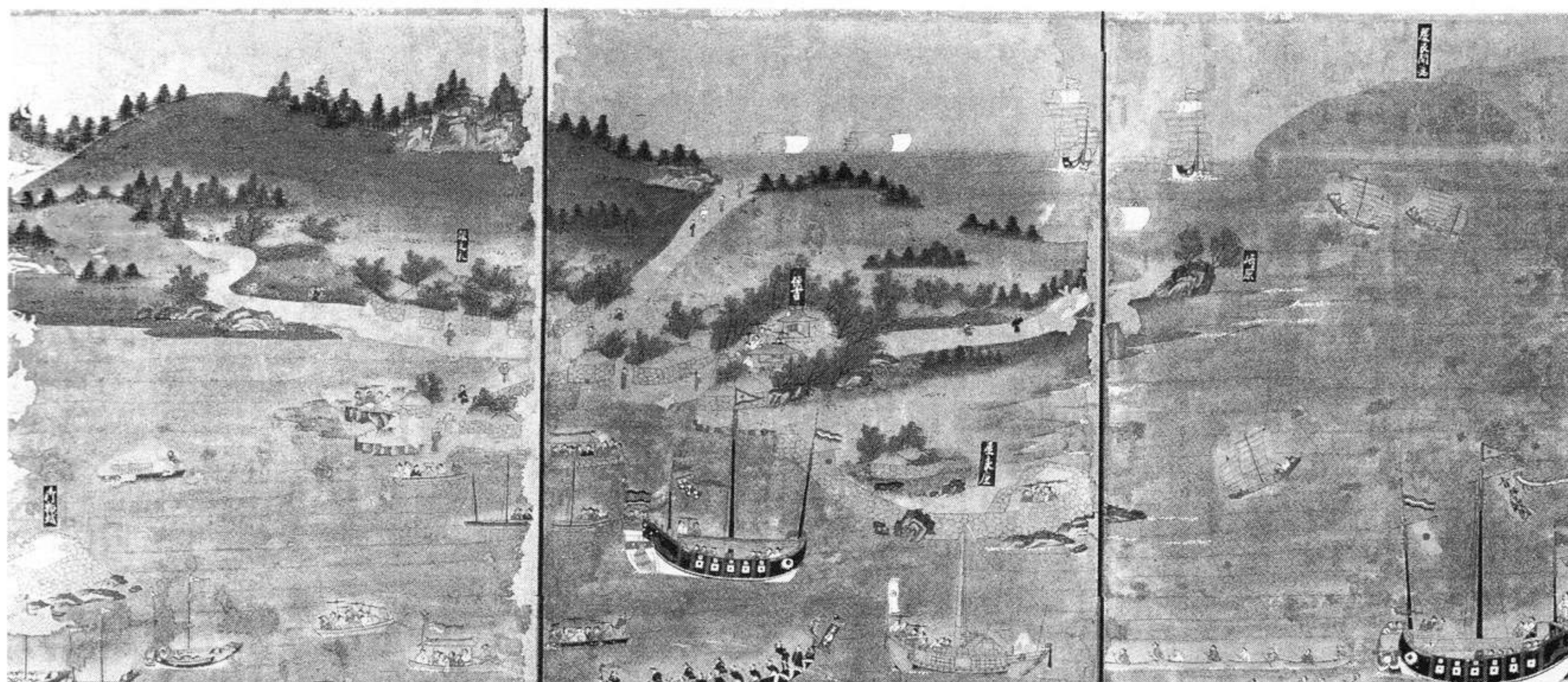
1908年（明治41年）ごろ、那覇と糸満を結ぶ県道（現国道331号）がこの地を貫いて開設され、以後交通の要所となった。戦後、基地建設などで大きく変容した。」（備瀬知伸）

■『那覇の民話資料（第1集 小禄地区）』（那覇民話の会 / 編1979 年）■

《がじゃん坂（びら）の名の由来》

「昔、唐から蚊帳（カチャ）を売ろうと、この地で唐人がガジャン（蚊）を放したため、そこはガジャンビラと名が付けられたそう。また、その放されたガジャンが国頭の先まで行くころには、沖縄は断髪世（ダンパチユー）になるという、こんな話がされていたということだ。言われたとおり、蚊が国頭の先まで行ったら、カタカシラから断髪世になっていたという話を私は聞きました。」

（鏡水出身 上地太郎 屋号：西又仲添小二男 明治33年生まれ 採話：上原利津子）



絵図に現れた〈ガジャンビラ〉住吉・垣花・崎原が記され、遠くに慶良間島、手前に屋良座・御物城が記されている。（屏風図「首里那覇港図八曲双」沖縄県立博物館所蔵）

写真でつづる《うるく^{かお}の貌》

小禄尋常高等小学校全景

「当間小学校」(現県営赤嶺団地付近) 小禄尋常高等小学校は、明治13年(1880年)設立、大正12年赤レンガ造りの校舎が完成、昭和16年4月に戦時体制下、小禄第一国民学校と校名を変更し、沖縄戦で焼失した。写真タイトルは、創立50周年となっており昭和5年頃の撮影と思われる。



サーター屋の風景 字具志

農業(サトウキビ)が盛んであった具志部落では、製糖時期になると6・7台のサーター車が稼動していた。ヒリグスク山(タンク跡)から撮影された1枚で、右から山城小、仲大嶺小の前、前大嶺のサーター車。金城重正氏の父、金城秀雄氏の父が製糖作業に精を出している。

談：金城秀雄氏



寄付金報告

去る4月25日に開催された「沖縄県農業協同組合経営管理委員会会長、小禄支店長就任激励会」の収益金から寄付金をいただきました。6月4日に赤嶺和雄事務局長に実行委員会を代表して長嶺敏博氏より目録が手渡されました。 寄付金総額 171,831円

